

本多静六通信

第20号

発行
本多静六博士会
を顕彰する会

本多健一先生の遺稿に捧げる

本多健一先生には平成二十三年二月二十六日ご逝去なされました。享年八十五歳、奇しくも祖父静六博士と同齢でした。

六月十二日、東京会館で「本多健一先生を偲ぶ会」が催され、五百名の関係者が集い盛大に執り行われました。

会場中央、先生の柔和な遺影の前には、天皇后陛下から御下賜の生花が飾られ、ノーベル賞受賞のお二方から弔辞があり、ゆかりの要人から偲ぶ言葉、先生の学生生涯を紹介する遺品や映像等が公開されました。

先生の玉稿は遺稿となりましたが、先号で「祖父本多静六の思い出」、本号では御自身の研究分野、「エネルギーと環境問題」について、わかり易く解説いただきました。

先生の研究は大成され、実用化されましたが、ノーベル賞候補のままご他界なされましたことは、返す返すも心惜しい次第であります。

謹んでご冥福をお祈り致します。
本多静六博士を顕彰する会
会長 小山千秋

エネルギーと環境問題について

本多健一

今、「エネルギー」と言えば、新聞、マスコミなどで年中出てくる言葉であります。それから、環境も大問題で、いろんなことを議論するときには、二言目には「環境」という言葉が出てきて、この両者を繋がないと、もう議論が進まないということになってまいりました。それで、環境の問題とエネルギーとの問題は、昔は別個のように思っていたのですが、もう環境とエネルギーとは、裏腹の関

係になっておりまして、今の一番の命題である「地球温暖化」の問題を考えると見れば、すぐに分かります。

地球温暖化の問題に関係して、今日日本が進めている方向もご承知のとおり、「温暖化ガス」の削減というところに詰まっています。エネルギー問題も環境問題も広い分野のことになるわけです。これらについての専門家は大勢おりますが、当面、日本が国として、あるいは世界の国が国として、まず目指さなければいけない命題は、温暖化ガス排出の縮小ということに突き詰められてきました。先般、鳩山首相が二十五%削減ということを国連で発表しましたが、将来、二千五十年でしたか、八十%削減



本多静六博士ゆかりの松(久喜市立三箇小学校)を背景に後列右から三人目が故本多健一博士

が昨日の鳩山・オバマ会談で議論されたということが、ニュースで報道されておりました。

私は、その温暖化ガスの専門ではありませんが、差し迫った問題になってきております。それは、どういことが原因かと考えてみますと、たとえば百年前の明治時代、あるいはもっと前の江戸時代には、このような環境問題は何も

ありませんでした。人類の歴史はどれだけあるかといえば、いろんな説がありますが、たとえば百万年といえますと、百万年の人類の歴史のなかで、最近の百年ぐらいに起こった問題もあります。それ以前はこの問題は無かったし、考える必要も無かったです。

生物の歴史はどのくらいかと思えますと、これにもいろんな説があります。たとえば二十億年といえます。地球の歴史はどのくらいかと思えますと、これは大分突き詰められてきましたが、四十億年くらいと言われております。その四十億年の地球の歴史の中で、生物の歴史が二十億年、人類の歴史が百万年から二百万年、その歴史の最後というか、現在を視点としますと、百年ぐらいの間に起こった現象であります。

その百年ぐらいの間に、昔と比べて何が変わったかと申しますと、これは全部人間がしたことによって変わってきたわけであります。江戸時代に今のような環境問題が無かったのは、江戸時代の生活と現代の私どもの生活が大違いによるものです。その大違いの元はというと、人間の文化・文明・科学技術の進歩によるわけで、私たちは、江戸時代よりも遥かに快

適な生活しております。私たちは、こういう立派な建物の中で生活し、空調のお陰で暖房も冷房もあり、明るい照明の下で快適な暮らしをしておりますが、そういう恩恵を受けることが出来る反面、今の環境問題が起こっているわけです。

今、環境問題と言われておりますが、皆さんは、何かもう危ない、とお感じになりますか？ 何もありませんでしょう。多分、このまま未来永劫に行けそうに思えて、我々には全く実感することが出来ないのですが、それを科学技術で検討していきますと、このままほったらかしにしたら、二十世紀はもたない、というのが結論です。その結果は、私は「一応」と言っておきます。ということは、ちよつと専門的になりますが、「科学技術の仮説」というようにお考えください。なぜかと申しますと、人類の将来にわたって証明されないのです。

「地球温暖化ガス＝環境破壊」ということは、学術的には証明されていませんけれども、じゃ仮説だから、あるいは、大丈夫かも知れないからほつとけ、と言って、このまま何十年か経ってから、この仮説は仮説ではなくて本当だと

いうことが分かった時には、手遅れになるということです。ですから、手遅れにならないうちに手を打っておこう、というのが、我々が子孫に対する義務なわけであります。我々と言っても、私のような後期高齢者は、このまま何もしないでほつといてもよいかも知れませんが、学生さんたちは心配です。ましてや、皆さん方の次のお子さんたちの世代になりますと、危なくなるかも知れません。その時に、さあ、大変だ、と、手打ったのではもう手遅れになりますから、今から、今の人間が相当な犠牲を払ってでも、手を打っておかなければならない、というふうに考えてください。

そこで、地球温暖化ガスの問題に戻りますと、その温暖化ガスが発生する元は幾つかあるのですけれども、その主役は「化石燃料」といわれる、言うまでもなく石油とか石炭とか天然ガスであります。それを、かつてないほど消費をして、我々は今のような豊かな生活をしているわけであります。では、そのような心配を解決するには、江戸時代に戻れば石油も使わないので心配はなくなり、ましてや、皆さんが、それでもよい、ということになれば、子孫の心配は

しなくてよいかも知れません。

エネルギーというのは、釈迦に説法かも知れませんが、エネルギーを使うと仕事をしてくれる、という事です。その仕事をしてもらうと、人間が楽をする、ということ、非常に簡単な話なのです。つまり、歩いて行くと大変なところを自動車に乗っていけば楽ですね。自動車はどうして走るかといえば、ガソリンを使うからです。ですから、その基本的なプリンシプルというのは、とても簡単で、人間が楽をするために、別の言い方をすれば、豊かな実りのある生活をするために、エネルギーのお陰で、エネルギーを使っているわけであります。我々人間は、今の豊かな生活を昔に戻したくはない、今の豊かな生活を続けながら、この環境問題を解決していきたい、ということで、環境問題の裏腹にエネルギー問題があるというわけであります。

そこで、化石燃料ということ、石油・石炭のことを申しましたけれども、エネルギーの種類は一杯あるわけで、よく言われておりますように、風力とか、太陽光とか、地熱とか、原子力というものがある、原子力は大切なエネルギーですね。エネルギーというも

のは物と違いました、無から有を生じるというものではなくて、エネルギーがエネルギーの形態を変えるときに仕事をしてくれますので、その仕事人間にとって必要なものになるということです。そのエネルギーを変えていく道筋というのは、いろいろありまして、その道筋を人間の役に立つように科学技術の力でもって、変えてやろうというのが、今のエネルギー問題の対象であるわけでありまして、分かりやすく太陽光を例として申します。地球上のあらゆる生物は、太陽光があるから存在しているわけで、地球上の全ての生命の根源は太陽にあるわけでありまして、太陽は、何十億年も前から、あるいはもつと前から変わらず降り注いでいるわけでありまして、太陽のエネルギーは何もしないでいても地球の温度を温めてくれ、今我々がこのような環境の下にいるということ、言うまでもなく太陽光のおかげであります。それでしたら、地球はどんどん温められて、限りなく温度が上がっていくではないか、というふうに見えますが、そうではなくて、地球もまた熱を宇宙に振りまいておりまして、太陽から地球に入ってきたエネルギーと、地球から宇宙に振り

撒いているエネルギー、これを「エネルギーの散逸」と言っておりまして、これがちょうどバランスがとれておりますので、今の温度で保たれているわけです。

それが、これまでの何百万年の人類の地球上における歴史であるわけでありまして、そのバランスが、ちよつと狂いだしたのでありまして、つまり、入ってくるエネルギーと、外に出るエネルギーのバランスが狂って、地球の中に溜まり出したというのが、今の地球温暖化です。その程度は、現在までのところ大したことではありません。温度で言いますと、これもいろんな説がありますが、五十年前と比べてせいぜい二、三度ぐらいい上がっております。これが、このまま上昇を続けたらこれは大変です。どこかで止まるかも知れませんが、止まらなかつたら大変というの、先ほど話しました、手遅れになってからでは大変、ということになります。

太陽のエネルギーの例で考えますと、今普通の状態で太陽熱が地球を今の温度に保ってくれているわけでありまして、そのエネルギー変換の道筋を、ちよつと利口に考えよう、ということになると、まず一番簡単なのが、冬は厚

着をするし、夏は薄着をする、ということ、これは、常識というか、黙っていてもそうしますね。それから、冬はなるだけ黒っぽい服を着て、夏は白っぽい服を着るようになっていますが、これは太陽熱の吸収関係からそうしているのです。その黒っぽい服をもつと頭を使って考えているのが、太陽熱温水器であります。これはもう何十年も前から日本では普及しておりますが、屋根の上に太陽熱温水器を置きますと、太陽熱で水が温められて、人間に役立つように使えるということ、このお陰で、ただでお風呂も沸かし、もうちよつと利口に考えれば、太陽熱で暖冷房もできるようになっておりまして、日本ではそういうものも普及しております。

これが分かりやすい例ですが、それをさらに最近の科学技術で考えますと、半導体が太陽熱を吸収すると電気に変えることが出来るようになりまして、これが最近大流行の「ソーラーバッテリー」です。これを屋根の上に置きますと、シリコンのソーラーバッテリーで太陽光の発電が出来るわけでありまして、そうしますと、石油を炊いて火力発電で賄っている電気を置き換えることが出来るようになります。

り、つまり、温暖化ガスを減らすことが出来るということになります。

風力、潮力も一例ですが、人間がまだ利用していないエネルギーのように、今まであったエネルギーが、無駄に捨てていたのでなく、エネルギーの流れを、もうちよつと利口に流れの道筋を変えてやる、というのが、エネルギーの利用でありまして、そして、環境問題の解決に繋がっているわけでありまして。

太陽光とか、空気とか、水というのは、有っても無くても分からない感じがしますが、でも、無かつたら大変です。よく「空気のような存在」という言い方がありますが、それが有っても無くても分からないような存在だけど、万一それが無かつたら、大変だ、というのが太陽光です。有っても当たり前ですが、無かつたら暗黒の絶対温度零度という状態になってくるわけでありまして。

そこで、もう一つ具体的なお話をします。今、我々は緑豊かな地球の上で生活しておりますが、その緑・グリーンということが、環境問題を解決するキーワードのように使われておりまして、これは

大変結構なことです。なぜグリーンが使われているか、言うまでもなく、植物が緑で象徴されているからであります。つまり、森や木や草や野菜でも、植物を豊にするということが、人類の豊さの根源になつていからであります。

それでは、もうちょっとその元を考えると見ますと、樹木の緑がなんで環境のキーワードになるか、これはただ一つのプロセスなのですが、「光合成」という緑の葉っぱが行っているプロセスです。光合成というのは、化学反応であります、それによって現在の人間を含む生物の存在が保証されているわけです。光合成をもうちょっと専門的に言うと、学生の皆さんは百も承知でしょうが、空気中の炭酸ガスと水から炭化水素(ハイドロカーボン)を化学反応で合成をしているのです。化学反応をするには、エネルギーが要するのですが、そのエネルギーが太陽光であります。ですから、太陽光を利用して、そのお陰で実は生物の存在そのものがあるということでありまして、これは誰でも知っていることなのですけれども、そこに思いをいたすと、植物がやっている光合成を科学技術の力で支えて、補強してやれば、環境・エネルギー

問題の解決に一番有力な処方になるのです。勿論、その根源である植物を大いに増やすということも大事です。しかし、地球全体が森というわけにはいきませんので、植物の代わりをする「人工光合成」をやることによって、石油の消費を抑えることが考えられております。

さて、光合成のプロセスは二つのプロセスからできています。第一段は水を分解して水素を作ることです。水の電気分解は皆さんご存知のように電気エネルギーを必要とします。私は藤嶋昭博士(現東京大学名誉教授)と一緒に研究をし、酸化チタンを電極としても一方の電極に白金をもちいて電池を組み、酸化チタン電極上に光を照射したところ、なんと電圧を加えることなしに白金電極上で水を分解し、水素を発生させることができました。この現象は「本多―藤嶋効果」と呼んでいただいております。このことは現在大変活発に多くの人たちにより研究されて化石燃料に置き換わる水素燃料が期待されております。

話を戻しまして、化石燃料の石油・石炭は、元はといえば植物の光合成の産物であります。生物の

歴史が二十億年から三十億年と申しましたが、その間にいろんな植物がやっていった反応は、太陽光を利用して光合成反応をやっていたのです。光合成反応の産物である炭化水素が、地球の中に埋もれていたのが現在の石油・石炭であります。これを今人間がせっせと使って、エネルギーの元として使うわけです。

四十億年の光合成の結果を、大体百年から二百年で使い果たそうとしているのです。どうということかと申しますと、分かりやすく言いますと、儉約の人がいまして、働き盛りのとき、一所懸命働いて警沢をしないで貯金をします。定年になって退職をして、退職金もいただけるし、貯めた貯金も沢山あるでしょう。退職の記念に、これから思い切つて楽しく過ごそうとして、貯めた貯金を一晩で豪遊することにすれば、これはさぞかし愉快でしょうね。何十年もかけて貯めた大切な貯金を、一晩で使い果たすというのが、実は、今、人類が置かれている状態です。

石油の残存量はどのくらいあるかと申しますと、いろんな説がありますが、一つの説では、もう二千五十年ぐらいで底を突くということが言われておりますが、

もつとあつたとしても、二十一世紀の末まではもたないのではないかという考えの人が多いようであります。いずれにしても、あと百年無いわけです。これは、環境問題とかそんなことを言わなくても、今の状態で使っていけば、無くなることは目に見えております。石炭と天然ガスはまだあるようですので、SLのようなものを引っ張り出してきてまた走らせる。空調を止めて火鉢で練炭とか炭田を燃やして暖を取り、冬はどてらを着て過ごすという生活に戻ればよいのだ。という人はそれでよいかも知れませんが、今の方々には無理だと思えます。そうなる、石油が無くなったとき、もう皆さんの孫・子の時代にはそれが近づいてきておりますので、やはり人類の叡智を働かして、五十年、百年の先まで我々が責任を持つて考えてやらなければならぬわけがあります。

どうやったらエネルギー・環境問題を解決できるか、一例として光合成のことを引いたわけでございますが、ちょうど時間になりましたので、エネルギー・環境問題をこれくらいにして終らせていただきます。どうもありがとうございます。(拍手)

第四回本多静六賞受賞者の紹介

埼玉県農林部森づくり課

主査 竹詰 一

一 第四回本多静六賞について

県では、本県出身で日本最初の林学博士となった本多静六博士の精神を受け継ぎ、緑と共生する社会づくりに貢献した個人・団体を、平成十九年度から表彰しています。

第四回本多静六賞については、平成二十三年一月十四日まで募集を行い、個人七名及び六団体の計十三の応募があり、東京大学教授の斎藤馨(さいとうかおる)さんが受賞されましたので御紹介します。



斎藤 馨さん

二 斎藤馨さんの功績

○秩父演習林の映像・音声を記録・発信する「サイバーフォレスト」を開発

二十年以上にわたり、秩父演習

林の日々の変化、鳥の鳴き声、葉擦れ音等森林景観を記録し、インターネットで発信する「サイバーフォレスト」を開発しました。蓄積されたデータを基に、過去・未来の森林景観をシミュレーションすることにより、今後の林業振興、環境保全対策等に活用するこ



秩父演習林に設定したロボットカメラで記録した映像をインターネットで配信



蓄積されたデータを基に、過去・未来の森林の姿をCG化(2001年 秩父演習林)

とができます。

○蓄積された映像・音声を利用した遠隔授業を実践

小中学校を対象として、蓄積された映像・音声を利用した遠隔授業を実践するなど、ユニークな環境教育を行っています。



秩父演習林内の定点観測ロボットカメラ



秩父の森の13年間の映像を公開。1年の中で葉の色の様子や年ごとの紅葉・落葉の比較が可能



東京大学と小学校をネットワークで結び、秩父演習林のブナ林の資料映像を教材配信して、遠隔授業を実践

三 表彰式

表彰式は、平成二十三年六月四日に川越市農業ふれあいセンターで開催した県植樹祭で行い、知事から表彰状と副賞としてヒノキ材を使ったレプリカ、賞金が贈られました。

四 終わりに

県では本多静六賞の表彰を通じて、博士を顕彰するとともに、緑と共生する社会づくりに取り組んでいます。引き続き皆さんの御理解・御支援をお願いいたします。

本多静六関係資料について

埼玉県立歴史と民俗の博物館

渡 政和

当館では平成二十三年八月三十日から平成二十四年二月二十六日まで、常設展示室の中の「人物コーナー」で、本多静六の関連資料を展示しています。「人物コーナー」は埼玉県にゆかりのある歴史上の人物について紹介するコーナーで、今までに塙保己一・平賀



展示風景

源内といった江戸時代の偉人や渋沢栄一・荻野吟子といった近代以降の著名人等を選んでその関係資料を展示しています。今回は「荒川の治水翁」と称された斎藤祐美（慶応二（一八六六）年～昭和十八（一九四三）年）とともに「日本林学会の巨星」として本多静六の関連資料を展示してその業績などを紹介しています。

今回展示している資料は、ほとんどが久喜市からお借りしたもので、『本多静六通信』第十二号にまとめられている「記念室所蔵本多家文書目録」「記念室所蔵本多家文書目録」にある文書類や「本多家資料」として保管されている資料が主体となっています。

これらの資料は、本多静六氏の業績を追うために欠くことのできない貴重な資料で、本多静六関係資料として一括で扱ってもいいようなまとまった資料です。こういった資料が久喜市で保管されていることは非常に大切なことで文書を扱う場合、現地主義と違って地元に関係資料が保存され、さらに将来にわたって確実に受け継い

でいかれることは理想的な形でもあります。そこで、ここではそれらの貴重な資料の中から何点かを紹介し、資料の大切さをより一層深めていただければと思います。

一 安本先生講義植物学巻ノ壱

この資料は、当時、東京農林学校の生徒であった折原静六（後の本多静六）が、同校の先生である安本徳寛の講義を受け、その内容を筆記したもので、「植物学」の位置付けやその区分、植物の構造など「植物学」の基本的な講義となっています。本紙は、和紙を袋とじにして綴じ紐の部分と和紙で覆い、背表紙で糊付けすることに より本が解体することがないように配慮しています。本文は墨書きで講義内容が細かく記録されています。本文中や欄外には茎や葉の形態などを図示しており、さらに鉛筆などの追記や合点など様々な書き込みがみられることなどから筆記後にも何度も読み返していた事がうかがえます。この資料は、本多静六の学問に対する探求心の深さなどを知る上でも重要です

が、明治二十年頃の植物学のレベルの高さを知る上でも大変貴重なものだと考えられます。



植物学巻ノ壱

二 林学通論第一

この資料は、本多静六が林学博士となり東京帝国大学で教鞭をとっていた頃の授業用のノートと考えられるものです。表紙には「Forstencyclopaedie No.1 von Dr.S. Honda」とドイツ語で書かれ、その下に「林学通論第一」と書かれています。「Dr」とあることから博士号を取得した後であることがわかります。本紙は洋紙で一枚の紙を半分折り、その折目に糸を通して紙を束ねており、



林学通論第一

綴葉装のようになっていいます。両面に野線が引かれており、現代の大学ノートに似ています。本文は日本語にドイツ語等の外国語の単語が混じっており、全体的に万年筆で書かれています。冒頭「諸君之：」から始まるように講義で話す口調で書かれており、授業中に使用したものでしょう。本文の上部は下部に比べてスペースが多くとっており、頭註を考えていたものと思われる、その部分や本文中の余白などに註記や訂正、補足説明

などを鉛筆で細かく書いており、講義を何度も推敲していることがわかります。さらに、最後の方には鉛筆書きで「試験問題」とあり、「農二」「林乙三」と読める記述の下に括弧付きでそれぞれ三問づつ問題文が書かれています。おそらく、林学通論が農学科と林学科において講義されていたため、別の試験問題を作ったのではないのでしょうか。これも当時の学問レベルを知る上で大変貴重なものです。

三 保留勲章の伝達について

本多静六は、昭和二十七年（一九五二）年一月二十九日、伊東市の国立療養所で亡くなりました。国は同日付けで勲一等瑞宝章（現在は瑞宝大綬章にあたります）を授与することを決定し、昭和天皇の名の下に勲一等に叙し、瑞宝章を授与しました。ところが、当時、勲章が品不足のため、実際に本多静六の遺族の元に届いたのは昭和三十一年（一九五五）年のことでした。この資料は、昭和三十年二月二日付けで、長らく留保されていた勲章を伝達することを内閣総

理大臣官房賞勳部庶務課長が通知した文書です。この文書から「勲章の在庫の不足は戦時中造幣局が空襲を受け又疎開したことなどに遠因し、その後連合軍司令部の意向によつて勲章の製作が全面的に禁止せられること、なりいよ不足」していったと書かれています。さらに「独立後は、極力関係官庁と折衝を重ね、早期解決」に務めてきたが「終戦以来特殊資材の不足、造幣局空襲以来の機能復旧、予算関係等諸種の事情」によつて遅くなつてしまつたが「漸く褒賞物品の一部製作が可能になりましたので、こゝにお渡しする」と書かれています。この資料は、単に勲章の伝達が遅れたことだけではなく、その理由として第二次世界大戦による造幣局の被害及び疎開による混乱、終戦後、占領下では連合軍最高司令官総司令部（GHQ）から勲章の製作が禁止されていたこと、独立後（いわゆるサンフランシスコ講和条約締結後）においても資材の不足などでも思うように勲章などの製作ができなかつたことなど当時の社会情勢



保留勲章の伝達について

以上のようにな本多静六関係資料のわずかな部分を紹介しただけでも貴重な資料であることは間違いなく、現在残されている資料を一点も欠くことなく大切に保存してゆくことは久喜市及び本多静六博士を顕彰する会に課された使命であると言つていいと思います。今の大人だけではなく、将来大人になる人にこの資料を受け継いでもらうためにしっかりと保存し、よりよい活用を図っていただきたいと思ひます。

本多静六博士ゆかりの地 明治神宮・日比谷公園を訪ねて

奥貫和夫

運よく今年(平成二十三年九月十五日)は抽選に当たり参加することができ、顕彰する会や現地の専門の講師陣から沢山学ぶことが出来た。スタッフ六名のお世話で三十名の参加者は八時半久喜市役所を出発、森を見に高速道路で都心のオアシスに向かうユニークさも公園の父ともいわれる博士の真骨頂だと思ふ。

車中、会の柴崎さんから「日本林学会の巨星 本多静六」パンフの概要説明を頂き、会長さんからは静六の生い立ちから生き様、専門の林学はもとより、貧乏をバネにして努力し、学者でありながら巨万の富を築き、自らは質素、匿名で社会貢献してきたことなどが紹介され、良き事前研修となった。渋沢栄一や大隈重信との関係など私は興味深い。十時半前に明治神宮に到着。迎えてくれたのは南参道大鳥居左右の楠。九十一年前地元、久喜・幸手から大八車で運ばれた由緒ある御献木だ。鬱蒼たる森を社務所に向かう。連日の猛暑



とても都心とは思えない明治神宮の森

が緑陰のここだけは無縁である。実際三度から四度は低いと巡検時に説明を受けた。

社務所では現地講師、総務部林苑担当の沖沢幸二氏から明治神宮の森づくりについて、代々木の当時の写真(荒地、松林など)をはじめ、博士らの森づくり計画、理念の説明。全国からの献木(樹丈二間から三間)や青年たち十一万人の勤労奉仕の模様を記録した貴重な資料をスライドで説明して頂き、講師の案内で蝉しぐれの森に入る。数々の発見と驚き(メモし



参加した皆さん(日比谷公園にて)

たが多々あり省略)が参加者の胸を打つ。百年先を見据えた森づくりは九十一年目の今日まさに天然更新の森になっているのだ。立派な休憩所で昼食。外国人や若者も多い。午後は日本の中枢部を経て日比谷へ。

第二の見学地は博士らの設計した初の近代洋風都市公園である日比谷公園だ。案内は当公園の高橋裕一氏。明治二十一年陸軍練兵場跡に洋式の公園を造ることになる。東京駅設計の辰野金吾から懇願され手がけたが当初は大変な抵抗があった。と、まずは歴史の紹介から、広さ十六万平方メートル

で開園百八年目を迎えた。博士ゆかりの明治三十五年植栽の銀杏並木、S字カーブの園路など博士のフリーハンドで描いたそのものだという。園内の花壇、有形文化財の旧事務所、心字池、雲形池、噴水、碑等、広場や建造物、十月一日にお披露目される自由の鐘から四季の名園の見事な写真を紹介した陳列場など、数々の見どころは参加者を魅了した。

そして何といっても極めつけは松本楼前の首かけイチョウだろう。日比谷交差点にあった樹齢四百年の大銀杏を無理だと言われながらも博士は「専門家」だと首を賭けて移植を成功させた。このシンボルたる大樹も樹木医の診断では老化が見られ、空洞部や数か所の枝にまかれた目印のテープが見える。ここで切るべきか否か意見が分かれていて事務所も困っているとか。これからも都会のオアシスは久喜の生んだ巨星 本多静六のお蔭で健康保持と道徳向上の場として末永く親しまれていく事だろう。

帰りのバスでの皆の感想もとてもよかった。顕彰する会と久喜市の素晴らしい企画に感謝している。

（本多静六博士の森だより）
本多静六博士の森から
今日は！

本多静六博士を顕彰する会

私たち九種類五百本の仲間たちは、平成二十年六月八日、菖蒲町で行われた埼玉県植樹祭の記念植樹として、完成を待つ「本多静六博士の森」に植えられることになりました。

植栽までの八ヶ月間は里子として博士の母校三箇小学校に預けられました。学校では「緑の少年団」活動として毎日水かけ、声かけをしていただきました。

いよいよ私たちが一人立ちする日が来ました。二月二十三日、雨上がりの寒い午後でした。県や町の来賓と小学生百余名の方々が大変な思いで植えてくださいました。

雨後の造成地は地面がぐじゃぐじゃで皆さんが靴の上にビニール袋を被せての悪戦苦闘でした。本多静六博士を顕彰する会や、係の方が穴を掘ったり、支柱を立てたりしてくれました。何と受難の旅立ちなんだろう。

後日、手直し、誘引（しぱりつけ）をして頂き、季節風（関東の

空っ風）の対策も終わりました。

でも、田圃を吹き抜ける赤城おろしは身に滲みます。毎日、見回りに来て、乾いた根元を踏んだり、ゆるんだ紐を直してくれたり、大勢で風上に防風ネットを張ってくれました。春になると草との戦いになり、私たちはたちまち、草に埋もれてしまいました。顕彰する会の方が刈払機や鎌で何回も除草してくれました。高い草を刈り、低い草を残してくれましたので安心してグングン伸びられました。

そして二年過ぎ、私たちは見える程大きくなり、草を見下ろすようになりました。

ここで各種類の代表からシリーズでお礼のメッセージを申し上げます。さて頂きます。

森の便りその一クスノキ（楠）

僕は元気なクスノキです。なぜか一人だけデカイので、デカグスと言われています。まだ十歳そこそこの新米ですが、仲間が小さいからお世話になった方々に最初にお礼を申し上げることになってしまいました。

皆さん今日（八月二日）は特に暑い中で草取り、草刈り、枝拾い、

支柱に使った古竹や枝燃し等、本当にご苦労様でした。有難うございました。お陰さまで森がサツパリ、スツキリ、爽やかにまりました。

それにも増して有り難いのは皆さんが運び入れてくれた大量の落葉、モミガラ、チップです。僕たちの根は、冬暖かく、夏涼しくその上、雨水と空気を程よく溜めてくれるので、地中は小動物の楽園「生物多様性環境」になりつつあります。僕たちは肥満競争みたい

にグングン伸びています。支柱に誘引（縛る）してもらった紐が幹に食い込んで苦しんでいるのを見て、縛り直したり、枝や葉が茂り過ぎると剪定してくれます。背丈も三メートルを超えました。

ここで自己紹介をさせていただきます。僕はクスノキ科のクスノキ、楠と書きます。

先祖は台湾、中国南部からやって来たと言っています。関東も利根川から北は苦手です。それにしても菖蒲の冬は特に厳しいです。どうなる



平成23年9月 クスノキ

のかと思いましたが、防風ネットを張ってくださいました。感謝、感謝でした。でももう要りません。僕は体に樟しょうという毒をもっている。樟の木とも言われます。中国では古くから宮殿建築や彫刻、家具等に使われています。日本でも古くから防虫剤の原料にされています。日本一デッカイ木は、鹿児島県蒲生のクスノキだと本多静六博士は言っていますよ。

冬になると風ばかりで誰も来てくれません。そんな時に、「おい、寒い、ヒモが緩んだなあ、もうじき春だからなあ」、その温かい声に心が滲みて忍耐と希望が湧いて来るんですよ。

どうか森に足繁く通い、私たちに元気を与えてください。

（文責 小山千秋）

本多静六博士の体験談から —あらゆる好機を捉える努力を—

本多静六博士を顕彰する会

静六博士は、「完全な林学者となるためには、自分に与えられた機会を好機と捉え、最大限の努力をすべし。」と常々考えていたという。

山林学の専門家としての静六博士に対し、ある時、セメント工場の煙害や鉛毒の調査委員を委嘱され調査を行ったことがある。調査はもちろんであるが、こうした機会を捉え、工場の全てを視察させて貰い、セメントの製造工程や原料等も調べ、この知識を生かし、山林調査などでいろいろの場所を調査に行った時など、「この場所にセメント工場を設けるとよいのでは・・・。」などと提言したり、時には、水源池調査などの折には、事前に水力発電の設計、設備費などを概略調査しておき、もろもろの山林調査の際、そこにある河川の水害や落差角度などを見て、おまかな水力発電計画を立て、その道の実業家に紹介できるようにしたそうである。

また、旅好きの静六博士は、海外に旅すること十七回、各地を旅したそうですが、その際、ベルト



博士が学んだ幸福寺（久喜市菖蒲町河原井）

やステッキに尺度目盛をつけておいて、珍しい物や新しい交通機関、公園、ホテルの設備など、これはと思うものには、尺度目盛のついたステッキで、立ちいった所までも調べ、自らの知識としたところで、温泉地問題やホテル、交通機関等はまだ参考意見を述べられるのは、このためであると言っている。

ところで、現代のように携帯用の様々なスケールや器具が発達していたなら、さらに幅広い知識を習得していたのでは・・・と想像したくなる。

このような幅広い知識の習得によつて、専門分野が浅薄になるのではという心配について、静六博

士は次のように述べている。
「そのような心配はない。反対にかえつて完全な林学者となる所になるのである。」

昔から山林学のような応用の学問は、これを実行しなければ用をなさない。実行するには、ただ単に山林のことだけでは不足なのであつて、交通機関、水力発電、農林経営はもちろんのこと、あらゆる社会の経済組織をだいたいいでも一通り知ることによつて、はじめで遺漏のない山林経営が可能になるのである。

つまり、一つの事業は間接または直接に他の全ての事業に関係がある。したがつて、あらゆる事業に対して、だいたいの知識を有することは、結局は、一つの事業を完全に遂行することになる。」

静六博士はこの持論を世界一の鉄鋼王と言われたカーネギーの生い立ちを例えとして、次のように述べている。

「カーネギーは、貧乏から逃れるため十三歳の時、故郷のスコットランドから母とともに八百トンの船で北アメリカに移住したが、船の中では船員から船具や機関の名前を教えて貰つたり、手伝いをしたりして、北アメリカへ着

き、木絹工場で糸巻小僧となつて働き、紡績工場では火夫手伝いとなつて働き、その間、常に機械のことをいろいろと覚え込んだのである。十五歳の時に郵便配達夫となつたが、この時は、余暇を利用して電信技術を習得し、これらの知識と努力とがやがて鉄工場の主任となり、遂に世界一の鉄鋼王にまで出世することができたのである。」

日本には、昔からの諺として「二兎追うものは一兎をも得ず」と言われているが、至極もつともなことである。

静六博士は、このことについても次のようにコメントしている。

「このような諺をあまり狭く窮屈に解釈する必要はない。私達は一定の職業に務めている間に、自然に専門以外、本業以外のことを知るに、適当な機会に出会うものである。その際は、躊躇なくその機会を捉えて、出来るだけ見聞を広くしておくべきである。」

このように、あらゆる機会を捉え努力し、広い視野を持つて専門の学問を更に深く研究することに努めることが大切であると提言している。

役員研修「ゆかりの地 懐古園」について

平成二十三年十月二十四日、長野県小諸市の懐古園を訪問しました。ここで懐古園についての歴史の変遷と懐古園の設計について「小諸市誌」から掲載します。

小諸城址から懐古園へ

明治四年の廃藩置県によって、小諸城は江戸時代からの武士社会の象徴としての使命を終え、城跡



懐古園三の門

をもつて園内の維持に当

無尽例会において名称を変えた。その目的は「毎年春四月十七日ヲ期シ牧野家ノ祠ニ詣テ、会員一同懐古園ニ於テ清遊ノ事」とし、基本金五百円（公債證書額面百円五枚）

治十三年、神社を祀り懐古園と呼ぶようになり、明治十四年には懐古神社参道左側に勝海舟の題額、中村正直撰書による懐古園碑が建てられた。懐古園は明治二十年から地元名士による懐古園無尽を結成して維持されてきたが、三十三年十一月

は小諸藩士であった人達によって維持されることになった。その後、黒門（二の門）は八満の正眼院の山門となり、足柄門は光岳寺の山門となった。また、銭蔵は石室とともに与良町へ、本丸屋形の一部は島川原（現東御市）へ移築された。大手門・三の門は競売されたが、移転されないままその地に残された。二の丸南側の石垣は明治四年の道路改修の際、与良町から荒町にかけて道路の端縁石に使われるなど城は姿を変えた。明

たつた。明治四十二年には神社の祭典は四月二十五日・二十六日に行い、催事費や神殿の修繕、酔月亭の維持など八か条の議定をおこなって公園としての体面を保つことになった。

懐古園はその後も養老会によって建物や園内の保存を行っていたが、園内が荒れはじめたことから、大正二年五月から懐古園保存会を作ることになった。保存会は旧小諸領六十余町村の賛助を得て、社殿と三の門の大修繕を行い、徳川家達揮毫による「懐古園」の額を三の門に奉額した。この時、園内の道路の整理や樹木の手入れが行われたことから、園内の風致は一新して懐古園の名は世に知られるようになった。懐古園の周りの古い松林は、大林区署より旧藩主牧野子爵に九千六百円で払い下げられた後に小諸本町の大家宗次に譲渡された。大正元年にこの松樹が伐採されることになると、小諸町会は風致の保存上反対の決議を行い、小諸町民や森林会も景勝地保存を県に訴えた。長野県では農務省と内務省の実地調査を求めた結果「風致林として必要なる事」「同地は浅間山脈と蓼科山脈の相結接地点にして防風林として必要なる

事に在り」との理由で伐採を禁じた。大正七年五月には懐古園の馬場で小諸大競馬会が開かれ、出場馬数百数十頭、観客は二万人が詰めかけた。大正十二年八月二十二日、摂政宮殿下（後の昭和天皇）が小諸城址に行啓された。その様子は新聞によって大きく報道されて、懐古園の名は全国に知られるようになり、園内は公園としてさらに整えられることになった。士族会は殿下の行啓を記念して天守台に「東宮駐駕の處」の記念碑を大正十五年に建てた（現在は二の門番所跡に移転）。

島崎藤村碑の建設と観光施設の充実

大正十三年秋に小諸義塾出身の篠原和市が衆議院議員に立候補した際に応援に集まった鷹野弥三郎ら藤村会員の間から、島崎藤村の「千曲川旅情の歌」詩碑を建設しようとする動きが持ち上がった。翌十四年の春、信濃協会理事であった鷹野が発議、小諸義塾同窓会と共同して建設費の募集を始めた。昭和二年七月二十四日行われた藤村碑除幕式が有島生馬の挨拶のもとに行われた。

懐古園の設計

大正十五年一月、隈部親信町長

町諸小郡久佐北縣野長
圖計設園公諸小



写一 本多静六博士の小諸公園設計図(大正15年5月)
(小諸図書館所蔵)

は小諸町大公園設計を発案し、明治神宮の森をつくった本多静六林学博士に基礎調査を依頼した。本多博士は一月十六日から懐古園を始め周囲の堀や林まで精細に調査した結果、十七日午後一時から小学校の講堂で三時間半にわたって講演した。本多博士と池田武人助手から五月に出された小諸公園(懐古園)設計案の一部を写一に記す。隈部町長は四か年計画で三万円余りを投じて小諸城跡を中心として約六万坪にわたって公園化を進めることにした。また、小諸商工会議所でも臨時総会を開いて応援することを決め、まず子供遊び場として初倉台に動物を

現在の位置
①三の門
②動物園
③馬場
④駐車場
⑤藤村碑

飼育する設備を完成するため約千五百円の寄付を集め、猿、熊、豹、孔雀、鶴等の動物を購入するよう本多博士に依頼した。

本多博士の緒言

小諸町が小諸城址一帯の公園設計を企てられたことは、世界文化の大勢に適應するものと私どもの大いに敬服するところであります。然るに地方公園の設計、殊に小諸町の如き由緒来歴に富んだ城址を公園として設計するには城址付近の名勝史蹟天然記念物に対する歴史伝説は勿論、地方民衆の要求、希望、人情、習慣、政治、経済の状態等に関する該博な知識と多年の経験とを持たなければ完全

な設計案を立て難い。幸に町長隈部親信氏、助役掛川周三氏その他当地方の事情に精してた有志諸君の御案内に依つてそれらの事情要求もほほ推察し得て、ここに小諸公園の大方針を樹立した次第であります。

以上をもつて役員研修の報告といたします。

出典は小諸市誌近現代篇(上)
平成十五年

(文責 柴崎英男)

●……………●
編集後記
●……………●

昨年三月、東日本大震災という未曾有の大災害と、その後の原発による放射能汚染災害、本多静六博士ならどんなメッセージを我々に発せられたらどうかと、考えさせられます。

さて、本号には、本多健一先生ご講演の続編「エネルギーと環境問題」の部分に掲載させて頂きました。ここに、御礼申し上げますとともに、ご冥福をお祈りいたします。

埼玉県からは、「本多静六賞」受賞者についての紹介を、農林部森づくり課竹詰さんから頂戴いた

しました。また、埼玉県立歴史と民俗の博物館の渡さんからは、本多静六人物紹介展示に因んだ資料について、歴史的な視点からの論考を頂きました。ともどもありがとうございます。その他、ゆかりの地訪問、本多静六人物随想、役員研修報告、それから今回から新シリーズ本多静六博士の森だよりを掲載することにしました。

今後とも誌面に対してのご感想、ご意見などお寄せいただければ幸いです。

【編集発行】本多静六博士を顕彰する会
《窓口》

久喜市役所企画政策課
〒346-8501 埼玉県久喜市下早見85-3
電話 0480-221111(代)
久喜市菑浦総合支所総務管理課
〒346-0192 埼玉県久喜市菑浦町新堀38
電話 0480-851111(代)

会員を募集しています

本多静六博士を顕彰する会では、会の活動をさらに充実させるため、一緒に活動していただく会員の方を広く募集しています。また、当会の趣旨にご賛同いただける団体会員の皆さんも募集しています。

入会受付…随時
年会費…個人会員1,000円
 団体会員5,000円
問合せ…本多静六博士を顕彰する会窓口